



きらっと彦根

彦根の魅力★再発見



調和のとれた多様性ある景観

“自分の住む辺りのまちの在り様や景観を話し合いませんか”

かつて本紙に「創造的修景を考える一より良き次代の為に」と題して寄稿をさせていただきました。

●「個性と伝統を生かす」とはどういう意味なのか。それらの事例を実感しよう

●「すまうということと修景」はどの様に考えればいいのか

●「彦根城周辺の景観重点地域の修景」＝彦根らしい文化景観とは何かを考えてみよう

●「OLD・NEWとOLD&NEW」古と新の混在ではなく古の中にある新しさを活かす

●「夢を持つこと」が大切。理想とする文化景観を実現しよう

●「時を越えて一時間に耐えうる修景」の発想が大切

●「彦根の目指したい「まち像」－発展・活性化とは」を考える

●「“まちや”再生へのおもい」に込められた理念を共有しよう。

●より良き明日の為に創造的修景が必要等を述べています。

今読み直してもその時に感じていたある種の予兆めいた想いは変わりません。基本には彦根のまちが活性化(=商業的にぎわい)の名のもとに古より受け継いだ風情、情感というものが薄れ、人のつながり、コミュニティが希薄なものになっていくことへの危機感にも似た哀惜の念がありました。評論家的に憂いているだけではダメで、具体的に行動することが必要だとの思いで“創造的”というフレーズを使いました。

景観とは建物の外観の連なりという意味だけではなく、そこで営まれてきた生活文化や人々の思いが表出した結果であり、そこに住む人々の思いと営みが形になったものである。古のものに思いを寄せ、さらに手を加え良きものへと変化し創造していくことが必要だと思えます。単に地元愛を抱くというだけではなく積極的に関わっていかうと思う人々の存在が不可欠です。

「シヴィック・プライド」の概念はまさにそこにあり、当事者としての責任と誇りを持ち、自分の住むまち、周辺環境へ関わるが必要と気づく人々が増えることが地域の文化を守り育て、継げていくこととなります。自らが担い手であるという自負心が、生きて生活する充実感に繋がるということであり、素敵なことだと気づいてほしいとの思いです。

彦根景観フォーラムは2017年度、2018年度に文化創発事業として、「NPO法人ひこね文化デザインフォーラム」との共同作業で、旧城下町内の建物の「悉皆調査」に基き次の資料を作成しました。

【目的】

- ①まちの現状やあるべき将来像を 地域住民や市民に分かりやすく示すこと。
- ②まちづくりの協議や会合での議論に具体性を持たせるデータを示すこと。
- ③好ましい景観を形成するための修景や利活用の指針、イメージを地域住民や市民と共有すること。

→次ページへ

【調査方法】

- ①旧城下町「内町地区と外町地区の一部」内の建物悉皆調査による現地調査票の作成及び写真撮影
- ②①の調査結果の集計およびデータ化

【提案内容】

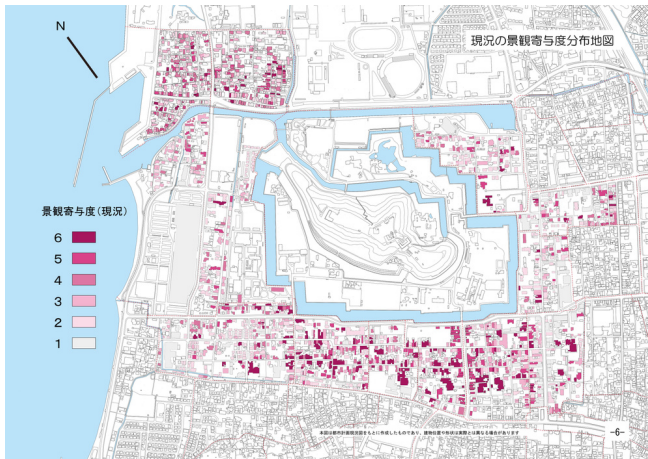
- ①調査に基づく景観寄与度別の建物分布地図（現況および改修後）の作成
- ②まちなみ景観の修景指針の作成
- ③各エリアにおける現在の景観分析の作成
- ④修景事業案（具体的な物件4件）の作成
- ⑤伝統的景観要素の希薄な街区での好ましい生活環境の修景イメージの作成

これをもとにエリア毎に、特徴ある要素を元にその地域に住む人々と「自分たちのまちを語る会」を開催してはと考えています。自分のまちに関心を持ち、環境や景観はどうあったらよいか、それにはどう行動するのがよいのか、共に考える機会を持てればと思います。

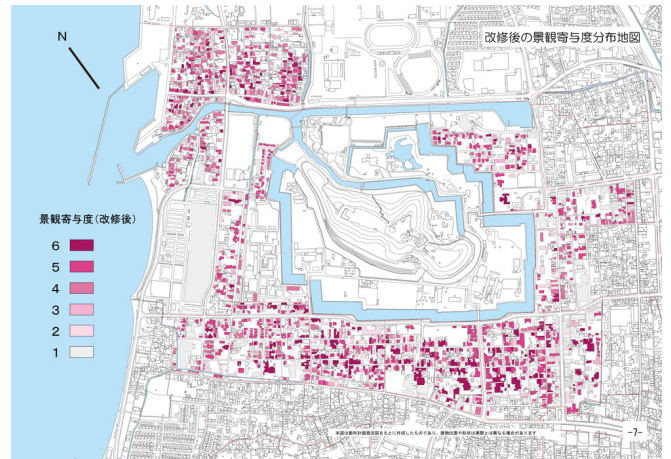
興味のある方(語る会を開こうと思われる方)は下記まで御連絡ください。

彦根景観フォーラム 担当理事 戸所岩雄

TEL. 090-3283-9508)



現況の景観寄与度分布図



改修後の景観寄与度分布図

さとの宿だより

晩翠青年の小宇宙



一圓屋敷の一階には書院と呼ばれていた部屋があります。そこにある天袋の絵は、落款から松尾晩翠の作であることがわかります。この画は山水図で、よくあるタイプの風景画だなあと長年思っていました。よくあるタイプの風景画と言うことは、人々があこがれて、誰もが癒やされる景観であるとも思います。

一圓屋敷で「自転車さんぽ」というサイクリングをするようになって、多賀の深山に分け入ったのち山を降り田園を抜けると、意外と簡単に琵琶湖岸に出ることがわかりました。

そういうことを知ったあと、この画を見ると、ひょっとしたら、この辺りを描いたのかもしれないと思いました。晩翠さんは、スケッチ場所を探し求めて多賀道を歩いて行き、あるとき佐和山から琵琶湖が見えて感動したのかもしれない。

左に、松原内湖、丸子船、その向こうに磯山、そして遠くに竹生島。右は明治に鉄道が通る以前の大洞村ではないでしょうか。晩翠さんの当時の年齢は24才。お師匠である内海吉堂さんとこの屋敷に逗留して、美しい山々と湖水の絵を仕上げたのかもしれない。

(江竜美子)



多賀さとの宿 一圓屋敷

<https://www.ichienyashiki.jp/>
〒522-0317 滋賀県犬上郡多賀町一円149
Tel. 050-3319-1050 info@ichienyashiki.jp